HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『土左日記』における畿外から畿内への越境 ： 一月三十日条と二月一日条の比較から
Author(s)	大場, 健太
Citation	国語国文研究, 153, 19-32
Issue Date	2019-08-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77823
Type	journal article
File Information	kokugo.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

『土左日記』における畿外から畿内への越境

――一月三十日条と二月一日条の比較から――

大場健太

はじめに

畿内とは律令制下に置かれた地方行政区域の特別地区であり、大化改新詔の第二条で初めて定められた。天平宝字元年に和泉国が新たに置かれて以降、畿内は大和・摂津・河内・山背・和泉の五国を指す語となった。古代日本には、畿内と畿外とを区別する法制度が存在した。『養老令』巻八公式令第二十一に

凡外官赴レ任。子弟年廿一以上。不レ得二自随一。畿内任官。不レ在二此限一。其須二覲問一者聴。[1]

とあり、外官への赴任に際して子弟を伴うことを畿外では禁止する一方で、畿内では認めている。また、巻九仮寧令第二十五に

凡請レ仮。五衛府五位以上。給二三日一。京官三位以上。給二五日一。五位以上。給二十日一。以外。及欲レ出二畿外一奏聞。其非レ応レ奏。及六位以下。皆本司判給。応二須奏一者。並官申聞。

とあり、畿外に出ようとする者は奏聞して許可を得ることが規定されている。『類聚三代格』巻十九禁制には

応レ禁二制孫王任レ意出二入畿外一事（仁寿三年四月二十六日）

応レ禁下断五位以上前司留二住本任国一并輙出中畿外上事（寛平七年十一月七日）[2]

とあり、孫王が畿外へ脱出することや国司が任期以後も畿外に在留することが禁止されている。これらの規定が徹底されていたかどうかはさておき、この規定は当時の平安貴族に畿内と畿外とを区別する意識を増幅させたと考えられる。

畿内と畿外の違いに言及した文学研究としては、藤井貞和氏による『源氏物語入門』（講談社、一九九六年）「明石の君　うたの挫折」（一九七九年初出）がある。氏は当該書の中で『源氏物語』における畿内としての須磨と畿外としての明石の違いについて次のように述べている（以下、傍線は筆者による）。

強調し過ぎることのない重要なこと、それは一方が畿内、一方が畿外、つまり王化の民と化外の民とによって住み分けられていた二点を、一方から一方へ源氏の君が超えたという点であろう。（中略）あくまで畿内ぎりぎりの壁ぎわまで来て謹慎の意向をあらわしているので、そのそとへ出ることは、何らかのタブーを犯す気分がともなう、はなはだしい決意の要することではなかったか。そのような越えがたい距離を源氏の君は超えてゆくのだ。

このような畿外と畿内を区別する意識に基づく作品分析は『土左日記』を読解するのに有効なアプローチであるといえよう。『土左日記』は、土佐国守であった紀貫之が承平四年十二月二十一日に土佐の国府を出発し、翌年二月十六日京の自邸に帰着するまでの五十五日間の旅を素材としている。この旅はいわば畿外から畿内への帰還の旅であり、作品内の記述から、同じ船旅であっても畿内である和泉国への入国が作品の区切り目であることが認められる。『土左日記』十二月二十二日条に、「和泉の国までと平らかに願立つ」という記述があり、前国司一行は京ではなく和泉国到達までの平穏を祈願している。[3] また、この十二月二十二日条の記述は、一月三十日条の「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」とも呼応しており、和泉国への到達が旅の一区切りであることが述べられている。

本稿では、『土左日記』において畿外から畿内への移動がどのように表現されているか、および、『土左日記』において、畿内と畿外の世界とがどのように描き分けられているかを考察する。

一　『土左日記』における畿外と畿内の境界

本節では『土左日記』一月三十日条および二月一日条を検討し畿外から畿内への移動がどのように表現されているかを確認する。

（一）一月三十日条前半

三十日。雨風吹かず。海賊は、夜歩きせざゝなりと聞きて、夜中ばかりに船を出だして、阿波の水門をわたる。夜中なれば、西東も見えず。男、女、からく神仏を祈りてこの水門わたりぬ。寅卯の時ばかりに、沼島といふところを過ぎて、たな川といふところをわたる。からく急ぎて、和泉の灘といふところに到りぬ。

（一）では、一月二十一日条から二十九日条まで消失していた記録としての地名の表記が復活し、一行がいつ、どこを通過したかが明確に記されている。言語遊戯を交えず、地名や時刻を明確に記しており、漢文日記に近い記録に徹する記述法をとっている。

ここで、漢文日記の一例として『時範記』を参照する。『時範記』には、平時範が因幡守として任地へ赴いた際の記事および任地から京へ帰任した際の記事が見られる。国司が任地と京の間を旅した際の記事が見られるという点が『土左日記』と共通しており、比較材料として参照するのに適切である。平時範が因幡守として赴任した際のある一日の記事を次に引用する。

十日、癸未、辰剋進発、申剋宿摂州武庫郡河面御牧司宅、摂津守送馬、酒肴等、兵衛大夫行季送酒、（康和元年二月）[4]

このように、『時範記』には出発した時刻、到着点が簡潔かつ明確に記されている。『土左日記』一月三十日条の前半の文章は、仮名文であるという点を除けばこの『時範記』の文章に近い。『土左日記』にも出発した時刻や到着点が記されている記事はあるが、それらの記事の大半は記録の外に諧謔表現や和歌を織り交ぜたものであることを考慮すると、(一)が例外的に記録的な文章のみで構成されている点は注目に値する。一月三十日条では、難所通過に不相応な諧謔表現が排され、記録的な文体が用いられることで、海賊と出くわす恐れのある地域を通過する場面の記事に緊張感が生み出されている。また、「からく急ぎて、和泉の灘といふところに到りぬ。」とあり、旅中最大の難所である「阿波の水門」を過ぎた後も一行の緊張は緩和しておらず、一刻も早く和泉国に入ろうとしていることが表現されている。

(二)一月三十日条後半

今日、海に波に似たるものなし。神仏の恵みかうぶれるに似たり。

今日、船に乗りし日よりかぞふれば、三十日あまり九日になりにけり。今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。

(一)が経路の記録であるのに対し、(二)は畿内の和泉国に入った後に一日の航行を総括した記事である。「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」と述べているところから、和泉国に入国し海賊への不安が解消されたことで、初めて一行の緊張が緩和したことが読み取れる。和泉国は、これまで旅中で再三語られてきた海賊への不安が初めて解消される場所として表現されているのである。[5]また、「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」という表現を「和泉の灘といふところに到りぬ。」の直後に置かず、一日の記事の最後に置くことで、いまだ畿外にある一月三十日条とついに畿内に入った二月一日条という境界を明瞭にしている。さらに、一月三十日条に和歌が一首も載せられていないことは、自ずとこの場面に緊張感を生んでいる。

【表二】を参照すると、総字数が二百字を越えているのに和歌の詠出を伴っていないのは一月三十日条のみであり、この現象は特異であると言える。[7]一月三十日条に和歌を一首も載せず、「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」と航海の安全を宣言した翌日の二月一日条にようやく和歌の詠出が再開されるという文章構成となっていることにより、ようやく緊張状態を脱したばかりで和歌を詠むまでの余裕を有していない一行の状況が表現されている。

(三)二月一日条

二月一日。朝の間、雨降る。午時ばかりにやみぬれば、和泉の灘といふところより出でて、漕ぎ行く。海の上、昨日のごとくに、風波見えず。

黒崎の松原を経て行く。ところの名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足らぬ。

このあひだに、今日は、箱の浦といふところより、綱手引きて行く。

かく行くあひだに、ある人のよめる歌、

たまくしげ箱の浦波立たぬ日は海を鏡とたれか見ざらむ

【表一】『土左日記』青谿書屋本日次別字数および歌数一覧表[6]

	字数	歌数
発端	77	
12月21日	123	
12月22日	77	
12月23日	135	
12月24日	65	
12月25日	52	
12月26日	273	2
12月27日	643	4
12月28日	70	
12月29日	48	
1月1日	192	
1月2日	25	
1月3日	38	
1月4日	85	
1月5日	34	
1月6日	9	
1月7日	792	3
1月8日	164	1
1月9日	813	4
1月10日	18	
1月11日	444	2
1月12日	38	
1月13日	215	1
1月14日	131	
1月15日	131	1
1月16日	156	1
1月17日	296	2
1月18日	414	3
1月19日	15	
1月20日	595	2
1月21日	422	2
1月22日	219	2
1月23日	39	
1月24日	15	
1月25日	43	
1月26日	328	2
1月27日	179	2
1月28日	16	
1月29日	369	3
1月30日	243	
2月1日	389	2
2月2日	27	
2月3日	93	1
2月4日	349	3
2月5日	1007	5
2月6日	222	1
2月7日	320	2
2月8日	133	
2月9日	625	4
2月10日	14	
2月11日	215	1
2月12日	12	
2月13日	10	
2月14日	19	
2月15日	115	
2月16日	894	5

(38)

また、船君のいはく、「この月までなりぬること」と嘆きて、苦しきに堪へずして、人もいふこととて、心やりにいへる、

引く船の綱手の長き春の日を四十日五十日までわれは経にけり (39)(後略)

(三)は、冒頭こそ航行の記録であるが、記事の途中には「五色にいま一色ぞ足らぬ。」という諧謔表現および和歌が交えられており、和泉国への入国を果たして安堵する一行の精神状態が反映された遊びのある文章となっている。

以上を総括すると、一月三十日条前半部ではあえて諧謔表現や和歌を用いず記録的な文章表現に徹することで海賊の存在が噂される地域を通行する緊張感を表現し、同日条末尾では、和泉国への到達により海賊への不安が解消したことを明言し、二月一日条では、諧謔表現や和歌を交えることで畿内に入った喜びや安心感を表現しているといえる。このように、『土左日記』において畿外と畿内は明確に描き分けられており、和泉国への入国は旅の区切り目であることが確認出来るのである。

二　和歌の違い

前節では和泉国への入国の場面のみを取り出し畿内と畿外の描写の違いを確認したが、本節以降は、分析の範囲を広げ、作品全体を通して畿内と畿外がどのように描き分けられているかを分析する。この問題を考える上で有益な先行研究は、塚原鉄雄氏による『土左日記』の構造分析である。塚原氏は本作品を甲小段落群（十二月二十一日～一月十日）、乙小段落群（十一月十一日～一月三十日）丙小段落群（二月一日～二月十四日）、丁小段落群（二月十五日～二月十六日）の四小段落に分割し、甲乙をまとめて第一小段落群、丙丁を

まとめて第二小段落群としている。塚原氏は一月三十日条と二月一日条の間に本作品の区切り目があるとの見方を示しているが、この二分割はすでに確認した畿内と畿外の区別そのものである。[8] 氏は次のように述べている。

巨視的に認定すれば、甲小段落群と丁小段落群とは、人心を主題として、その表現素材を選定する。そして、乙小段落群と丙小段落群との表現素材を選定する主題は、自然であるといえよう。また、表現素材によって触発される前司一行の心情は、甲小段落群を明とすれば、乙小段落群は暗である。さらに、丙小段落群が明で、丁小段落群は、暗であるといってよい。

塚原氏は、乙小段落群と丙小段落群は共に自然描写が主題となっていながらも、前者（畿外）の心情が暗であるのに対し、後者（畿内）の心情は明であると指摘しているが、心情表現だけではなく、作中の和歌においても畿内と畿外の違いを認めることができる。『土左日記』の旅の大部分を占めるのは海の旅であり、旅中においては海の景を多く歌に詠んでいるが、その景色の捉え方は、和泉国への入国の前後で明らかに異なっている。

【表二】を参照すると塚原氏が指摘する通り、甲小段落群においては、対人関係の記事が多く嘱目の景を詠んだ歌は少ない一方、室津滞留以後（乙小段落群）は景色を詠んだ歌が多いと言える。

乙小段落群の歌の特徴は二点指摘できる。一点目は、海上の自然現象を詠んだ歌が多く生物が歌に詠まれないという点である。具体的には、波（18番歌・19番歌・21番歌・22番歌・23番歌・24番歌・26番歌・28番歌・30番歌・37番歌）、雲（17番歌・33番歌）、風（18番歌・31番歌・32番歌・34番歌）月（20番歌・25番歌）、日（33番歌）である。

この点について、そもそも海上には生物が不在であり、波や風しか歌題になるものがなかったのであり、無生物が歌題となるのは当然であるという批判が想定されるが、この問題については、海上にいるために歌題が限定された結果と見るよりも、選択の結果による表現的工夫と見る方がよいだろう。なぜなら、『土左日記』よりやや後に成立したと推定される『古今和歌六帖』には、「うみ　あまた　くなは　しほ　いかり　あみ　なのりそ　も　みるめ　われから　うら　かひ　なぎさ　しま　はま　ちどり　はまゆふ　さき　いそ　なみ　みをつくし　かた　みなと　とまり」が立項されており、『土左日記』成立期には海に関連する歌題は豊富にあったことが確認できるからである。[9] 海での歌題は豊富にあるにも拘わらず、畿外で歌に詠まれる景色には偏りが見られる。

特に波を雪や花に見立てる表現が、一月十六日条、同十八日条、同二十二日条において反復されている点は注目に値する。現実世界の海や停泊地は、季節や天候により変化を見せるものであっただろう。一月十八日条に「この泊、遠く見れども、近く見れども、いとおもしろし。かかれども、苦しければ、何事も思ほえず。」という表現がある。停泊した泊の景色が美しいことを想起させつつ、その美景をも無為にする船旅の苦しさが語られる。泊の美景は、「おもしろし」の一語で片付けられてしまう。室津において歌に詠まれるのは、荒れる海に立つ白波なのであって海や海の近くの美しい風景は風景描写や詠歌の対象とはなり得ていない。

【表二】『土左日記』畿外詠一覧表（船歌は表から除外した）

歌番号	段落番号	和歌本文	詠歌の対象
1	甲小段落群	みやこ出でて君にあはむと来しものを来しかひもなく別れぬるかな	君
2		しろたへの波路を遠く行き交ひてわれに似べきはたれならなくに	波路
3		みやこへと思ふをもののかなしきはかへらぬ人のあればなりけり	かへらぬ人
4		あるものと忘れつつなほなき人をいづらととふぞかなしかりける	なき人
5		惜しと思ふ人やとまると葦鴨のうち群れてこそわれは来にけれ	われ
6		棹させど底ひも知らぬわたつみの深き心を君に見るかな	深き心
7		あさぢふの野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり	池　若菜
8		行く先に立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ	われ
9		行く人もとまるも袖の涙川汀のみこそ濡れまさりけれ	行く人　涙
10		てる月の流るるみれば天の川出づる港は海にざりける	月　海
11		思ひやる心は海をわたれどもふみしなければ知らずやあるらむ	思ひやる心　海
12		見わたせば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる	松　鶴
15		まことにて名にきくところ羽根ならば飛ぶがごとくにみやこへもがな	羽根
16		世の中に思ひやれとも子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな	子　思ひ
17		雲もみな波とぞ見ゆる海女もがないづれか海と問ひて知るべく	雲　波
18		立てば立つゐればまたゐる吹く風と波とは思ふどちにやあるらむ	風　波
19		霜だにも置かぬかたぞといふなれど波の中には雪ぞ降りける	波
20		水底の月の上より漕ぐ舟の棹にさはるは桂なるらし	月
21		かげ見れば波の底なるひさかたの空漕ぎわたるわれぞわびしき	波　空
22		磯ふりの寄する磯には年月をいつともわかぬ雪のみぞ降る	波
23		風による波の磯には鶯も春もえ知らぬ花のみぞ咲く	波
24		立つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつつ人をはかるべらなる	波
25	乙小段落群	青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも	青海原　月
26		みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ	波　月

28	わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守	波	
29	漕ぎて行く船にて見ればあしひきの山さへ行くを松は知らずや	山　船	
30	波とのみひとつに聞けど色見れば雪と花とにまがひけるかな	波	
31	わたつみのちふりの神に手向する幣の追風やまず吹かなむ	幣　追風	
32	追風の吹きぬるときは行く船の帆手うちてこそうれしかりけれ	追風	
33	日をだにも天雲近く見るものをみやこへと思ふ道のはるけさ	日　天雲	
34	吹く風の絶えぬ限りし立ち来れば波路はいとどはるけかりけり	風　波路	
35	おぼつかな今日は子の日か海女ならば海松をだに引かましものを	海女　海松	
36	今日なれど若菜も摘まず春日野のわが漕ぎわたる浦になければ	浦	
37	年ごろを住みしところの名にし負へば来寄る波をもあはれとぞ見る	波	

このように、白波が歌に詠まれるのは、それが航行上好ましいものではなく、旅の上で関心を向けざるを得ない対象であったからである。波を雪や花に見立てる同技巧の歌を繰り返し詠むことによって、眼前には白波だけが見られるという風景を描き出し、海の風景は変わらずいたずらに時間だけが過ぎていくという一行の時間感覚を表現し、そのような表現により白波に悩む一行の様子が浮かび上がるという工夫が凝らされているのである。

21番歌では、「空漕ぎわたる」により、海上には一行の船の他に何の生命も存在しないという状況が暗示され、「われぞわびしき」により、そのような海を漕ぎ行く一行の不満、やるせなさが表現されている。波、風、月、日などといった、海上の気象や天候を詠むことによって、海は依然として生命の無い世界として表現され、長期間の船旅を余儀なくされる一行のやり切れなさが強調される。

二点目は、暦日体験の機会喪失を表現する歌が見られるという点である。一月二十九日条には、正月初子の日でありながら海上にいるため小松引きや若菜摘みができないという状況が歌に詠まれている。これらの二首では、35番歌「おぼつかな今日は子の日か」、36番歌「今日なれど若菜も摘まず」というように、暦日感覚が欠如していることが表現されている。[10]

続いて、畿内で詠まれた歌における自然描写の特徴を見ていく。【表三】を参照すると、丙小段落群の歌の特徴は三点指摘できる。一点目は、立たない波を詠む歌が見られるという点である。畿外においては「波」が立つことを詠む歌が多かった一方、畿内に入った矢先の二月一日条で詠まれた38番歌では、「波」が立たないことが詠まれている。なお、海に波が立たないことは45番歌にも詠まれている。

二点目は、畿外においては生物を詠んだ歌が少なかったが、畿内においては、「忘れ貝」（41番歌・42番歌）、「松」（44番歌・46番歌）、

【表三】『土左日記』幾内詠一覧表（船歌は表から除外した）

歌番号	段落番号	和歌本文	詠歌の対象
38	丙小段落群	たまくしげ箱の浦波立たぬ日は海を鏡とたれか見ざらむ	箱の浦　海
39		引く船の綱手の長き春の日を四十日五十日までわれは経にけり	綱手
40		緒を縒りてかひなきものは落ちつもる涙の玉を貫かぬなりけり	緒　涙
41		寄する波うちも寄せなむわが恋ふる人忘れ貝下りて拾はむ	波　忘れ貝
42		忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ	忘れ貝
43		手をひてて寒さも知らぬ泉にぞ汲むとはなしに日頃経にける	手　泉（＝和泉国）
44		行けどなほ行きやられぬは妹が績む小津の浦なる岸の松原	小津の浦　松
45		祈り来る風間と思ふをあやなくもかもめさへだに波と見ゆらむ	かもめ
46		今見てぞ身をば知りぬる住江の松より先にわれは経にけり	住江　松
47		住江に船さし寄せよ忘草しるしありやと摘みて行くべく	住江　忘れ草
48		ちはやぶる神の心を荒るる海に鏡を入れてかつ見つるかな	荒るる海
49		いつしかといぶせかりつる難波潟葦漕ぎ退けて御船来にけり	難波潟　葦　御船
50		来と来ては川上り路の水を浅み船もわが身もなづむ今日かな	川　わが身
51		とくと思ふ船悩ますはわがために水の心の浅きなりけり	水
52		世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし	桜
53		千代経たる松にはあれどいにしへの声の寒さは変はらざりけり	松
54		君恋ひて世を経る宿の梅の花むかしの香にぞほにほひける	宿　梅
55		なかりしもありつつ帰る人の子をありしもなくて来るがかなしさ	人の子
56		さざれ波寄するあやをば青柳の影の糸して織るかとぞ見る	さざれ波　青柳
57	丁小段落群	ひさかたの月に生ひたる桂川底なる影も変はらざりけり	月　桂川
58		天雲のはるかなりつる桂川袖をひててもわたりぬるかな	天雲　桂川　袖
59		桂川わが心にもかよはねど同じ深さにながるべらなり	桂川　心
60		生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさ	わが宿　小松
61		見し人の松の千歳に見ましかば遠く悲しき別れせましや	松

「かもめ」（45番歌）、「忘れ草」（47番歌）というように海上および海辺の生物を詠む歌が多く見られるという点である。

三点目は、春らしい景物が歌に詠まれているという点である。38番歌に続く39番歌では、「長き春の日」と、春になり日照時間が長くなったことが詠まれている。

【資料二】「春の日」が長いことを詠む歌

わがこころはるのやまべにあくがれてながながしひをけふもくらしつ（亭子・14番歌）

あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ（古今・恋三・624番歌）

ここにしてけふをくらさん春の日のながき心をおもふ限は（貫之集・34番歌）

山ざくらよそにみるとてすがのねのながき春日を立ちくらしつる（貫之集・61番歌）

春の日のながき思ひはわすれじを人の心に秋やたつらむ（後撰・春下・86番歌）

【資料二】を参照すると、春の日が長いことを詠む歌および、『古今集』624番歌、『貫之集』34番歌、『後撰集』86番歌のように、時間が長いことの比喩として用いる歌が見られる。これらの例から、「春の日」は長いものとして歌に詠みこまれるのが通例であったと言える。『土左日記』39番歌は、二月に入ったその日に、帰京の旅が予想以上に長引き、「この月までになりぬること」と嘆いて「船君」が詠んだ歌であり、仲春の二月になって、いよいよ日が長くなったことが常套句を用いて表現されている。畿外においては、季節感を感じさせる表現は見られなかった一方で、畿内に入った矢先に春を実感したことが表現されている。さらに、海を離れた後、川を遡上しながら渚の院を通過している際には「梅」（54番歌）、「青柳」（56番歌）が詠まれている。「梅」および「青柳」を詠み込んだ歌は、『古今集』巻一春上部に複数あり、「梅」や「青柳」を詠むことは、その地が季節感ある地であることの表現となるのである。

以上を総括すると、畿外の海は、生命の無い地や欠乏の地として形象されるが、畿内の海においてはその要素は見られなくなり、海を離れ川に入った後は、春らしい樹木が歌に詠まれると言える。京へ近づけば近づくほど、次第に生命ある世界としての自然描写が増加していくのであって、京の外が一様に無の地として形容されているのではないことが確認できる。先に見た通り、畿内に入った矢先の二月一日条で詠まれた二首の歌（38・39番歌）における風景のとらえ方は畿外とは大きく異なっており、畿内への到達が旅の区切り目であることが、和歌中の自然描写の違いからも把握できるのである。

三　色彩表現の違い

ところで、『土左日記』には色彩表現が多く用いられている。伊原昭氏は次のように述べる。

土左は少なくとも色に対しては非常に意識的であり、一つの情景なり、現象なりの色を受けとったまま描くというのでなしに、時限や場の異なるものを引き出してきたりして、あれこれと意

識的に構成し作為して、それをそう表現することにむしろ興味を持ち、人にもそれを示そうとする。すなわち、その意識をまるだしにしている。[11]

氏が指摘する通り、『土左日記』において、色彩表現が意識的に用いられているが、畿外と畿内とでは色彩の捉え方が異なっているのである。次に示す。

【資料二】畿外における色彩表現

しろたへの波路を遠く行き交ひてわれに似べきはたれならなくに（十二月二十六日条）

今日は白馬を思へど、かひなし。ただ、波の白きのみぞ見ゆる。（一月七日条）

行く先に立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ（一月七日条）

船に乗り始めし日より、船には紅濃く、よき衣着ず。（一月十三日条）

黒き雲にはかに出で来ぬ。（一月十七日条）

青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも（一月二十日条）

黒鳥といふ鳥、岩の上に集まり居り。その岩のもとに、波白くうち寄す。（一月二十一日条）

黒鳥のもとに、白き波を寄す（一月二十一日条）

海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。（一月二十一日条）

わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守（一月二十一日条）

【資料二】を参照すると、畿外の色彩表現では、白を用いた表現が最も多く黒を用いた表現も複数見られることが分かる。「白」と「黒」の他には、一月十三日条に「紅」、一月十三日条に「青」が登場しているが、前者の「紅」は「着ず」という言葉で打ち消されており、後者の「青海原」の「青」は白と黒の中間の範囲を指す語であり、二十日の月は更待月とも言われる通り、夜遅くに出る月であるから海面は青よりも黒に近い色であったと考えられる。このように、畿外の海は、白や黒で把握される世界であったといえる。

また、先に挙げた例の大半が単色での表現となっている点も注目される。例えば、一月七日条では、「白」という語が意図的に反復されている。例外的に、一月二十一日条では、鳥の黒色と波の白色とを対比する表現が見られるが、続きを読み進めていくと、「頭もみな白けぬ」や「わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守」といったように白色を用いた表現が反復される。この日の景色は白色を基調としていて、その中に黒い鳥が浮かび上がっているという様子である。このように、畿外の海の色彩は単色でとらえられるのが基本であり、色彩豊かであるとは言い難い。

一方、畿内に入った矢先の二月一日条には、次のような色彩豊かな表現が見られる。

黒崎の松原を経て行く。ところの名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足らぬ。

黒崎の松原の景色が色彩語を用いて表現されている。二月一日条の景色は「五色にいま一色ぞ足らぬ」とあり、あとほんの一色あれ

ば五色が揃ったのに惜しいという感覚が表現されている。これは、前日の一月三十日条において、「阿波の水門」を渡る際に「夜中なれば、西東も見えず」と言っているのと対照的であり、色彩の豊かさが強調される表現となっている。

波の色が白いことは畿外においても繰返し表現されてきたが、二月一日条においては、白が単色ではなく、五色のうちの一色として把握されている。第二節で述べた通り、畿外においては、荒れる波の例えとして波を雪に見立てる表現が繰りかえされていたが、「風波見え」ぬ好天の二月一日条においては、波の白さは航行上の障害としてではなく、五色のうちの一色として、いわば言語遊戯の素材として把握されているのである。「五色にいま一色ぞ足らぬ」は一種の言葉遊びであり、諧謔表現を交えている所に記者の心の弛緩を見て取ることが出来る。『土佐日記燈』は「これらのをかしさをかゝれたるはけふ海もしつかにて日頃のわひしさもなくさみ心もゆきぬるさまをおもはせたるなり」[12]と説き、海が静かであったことが心の平安をもたらしていると指摘するが、十二月二十二日条「和泉の国までと平らかに願立つ」、一月三十日条「今は和泉の国に来ぬれば、海賊ものならず。」という記述を踏まえると、「海賊ものならず。」と評される和泉国にたどりついたことが記者に安堵をもたらした要因の一つとして挙げられるだろう。

このように、二月一日条においては、畿内に入った安心感が色彩表現によって表されているのである。

四　地名表記の違い

『土左日記』には原則として、「大湊に泊まれり。」（一月二日条）や「今し、羽根といふところに来ぬ。」（一月十一日条）のように、停泊地や通過地の名が記録されているが、例外的に一月二十一日条から二十九日条まではこのような記録としての記述が一旦消失し、一月三十日条「阿波の水門」の通過後から地名の記録が復活するという特徴がある。

地名の記録の消失という現象をめぐっては、「海賊の難ありときいて、心の余裕を失い逸したのであろう。或は地名をその際聞き訂さなかったか、後日その記憶を失ったかとも考えられる」[13]、「貫之が航海を行った当時の芸東の海岸地域には殆んど地名もつけられていなかった」[14]のように、脚色性を認めない見解と、「全く地名を明示せず、たゞ海賊来襲の報が頻りに伝わることを報告し、各日の文章も短くして、いかにも危機の切迫する実感を出す」[15]と脚色性を認める見解の双方が示されている。この地名の記録の消失という現象が意図的なものであるか否かはさておき、地名の記録の消失という現象はその地を異郷として形象する表現効果を発しているのである。

例えば、一月二十九日条においては、地名を一行が把握していないことが作品の表現上大きな意味を持っている。

おもしろきところに船を寄せて、「ここやいどこ」と、問ひければ、「土佐の泊」といひけり。昔、土佐といひけるところに住みける女、この船にまじれり。そがいひけらく、「昔、しばしあ

りしところのなくひにぞあなる。あはれ」といひて、よめる歌、

年ごろを住みしところの名にし負へば来寄る波をもあはれとぞ見る（37）

一月二十九日条では、「土佐の泊」という地名が登場するが、地名の表記法は通常の記録としてのものと異なっている。先に挙げた一月十一日条のように、「土佐の泊に来ぬ。」などとあるのが通常の記録としての表記法であろうが、ここでは「土佐の泊」という地名は人に尋ねて初めて知ったものとして表現されている。記者は室津より先の畿外の地名を知らない人物として設定されている。このように、海賊が登場すると噂される区域は、一行が地名すら把握していない地として形象されており、その地の得体の知れなさ、不気味さを醸し出しているのである。

このように、一月二十一日条から二十九日条までは記録としての地名の記述が消失しているが、一月三十日条「阿波の水門」の通過後地名の表記が復活する。また、和泉国到着以後は地名を詠み込んだ歌が作られている。38番歌では「箱の浦」、43番歌では「泉（＝和泉国）」、44番歌では「小津の浦」、46番歌および47番歌では「住江」、49番歌では「難波潟」、57番歌・58番歌・59番歌では「桂川」が詠みこまれている。この現象について、今井俊哉氏は次のように述べる。

畿内では三首に一首の割で、歌に地名がよみこまれているのに対し、畿外では一割に満たない。まさに畿内では、そこに戻ってきたことを確認するかのように、地名を縫いつつ和歌がよまれてゆく。[16]

氏による、畿内では地名を詠む歌が多くみられ畿内に戻ってきた喜びを表現しているという指摘は妥当である。畿内に入った矢先の二月一日条では早速地名を詠んだ歌が詠まれている。

このあひだに、今日は、箱の浦といふところより、綱手引きて行く。

かく行くあひだに、ある人のよめる歌、

たまくしげ箱の浦波立たぬ日は海を鏡とたれか見ざらむ（38）

38番歌は、箱の浦の海の穏やかな風景が表現された歌である。この穏やかな景色は、畿内に入り安堵する一行の精神状態と調和するものであり、畿内に戻ってきた喜びがこの歌の中にこめられているのである。

このような、地名を詠んだ歌による心情表現は、二月十六日条の桂川を詠んだ三連作において顕著にみられる。すなわち、「桂川」を詠んだ歌を三首連作することによって入京を喜ぶ一行の様子を表現しているのである。このように、畿内においては、地名を率直に詠み込んだ歌が頻出する。「四年五年」ぶりの帰京に待ち焦がれる都人にとっては、畿内の地名は歌に詠みこむに値するものであったと考えられる。[17]

なお、畿外においても地名を詠み込んだ歌は二首見られる。

あさぢふの野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり（7）

まことにて名にきくところ羽根ならは飛ぶがごとくにみやこへもがな（15）

7番歌の詠者は、所の名は「池」なのに、水がないという点にお

もしろみを見出している。15番歌も事情は同様で、「羽根」という地名に着目し、その地名から鳥が空を飛ぶ羽根を連想している。これらの畿外詠における地名は、言語遊戯の媒介に過ぎず、地名が指し示す地域そのものに感動しているわけではないのであって、その地の景物を表現しようとする意図が見られない。

以上ここまで、『土左日記』においては、地名の表記の有無が畿内と畿外とで使い分けられていること、地名を詠み込んだ歌が畿内にて多くみられ、地名を詠みこむ歌の担う意味が畿内と畿外とでは異なることを確認してきた。畿内と畿外の区別は、地名の表現においても表れているのである。

おわりに

本稿では、『土左日記』において畿外から畿内への越境を印象づけるための文章表現の工夫がなされていること、和泉国への入国の前後で、和歌、色彩表現、地名の表現、に違いが見られ、両者が描き分けられていることを確認した。従来の『土左日記』では、旅の始発と終着だけを強調して京と任国の土佐国を対比により把握する論考が多く、本作品の大部分を占める旅の途次についての言及が乏しい傾向があった。しかし、『土左日記』は、五十五日間の全日程を一日たりとも省略することなく記す点にこそ特徴があり、作品構造を考える上では旅の途次の記事を捨て去ることはできない。旅の途次の記事を分析すると、和泉国への入国は旅の区切り目であり、一月三十日条には、海賊の存在が噂される海域を渡る緊張感、二月一日条には、畿内へ帰ってきた喜び、安心感が対照的に表現されており、畿外と畿内は異なる地域として明確に描き分けられているといえる。

作者貫之は、畿外と畿内を描き分け、その越境の場面を巧みに表現することで、本作品を単なる土佐国から京への帰任の旅の記録という実録の域から脱皮させ、読者に感興を催す文芸の域に到達せしめた。『土左日記』に読者を意識した表現や構成が見られることは既に諸氏が指摘している通りであるが、畿内と畿外の描き分けも、まさに都人である読者を意識したものであろう。

本論は、藤井貞和氏の『源氏物語』における須磨と明石の違いに関する論考から着想を得た。このような畿内と畿外の区別が、『源氏物語』や『土左日記』だけではなく、他の王朝文学においてもあまねく見られるものであるか、今後論証が試みられるべきであろう。こうした作業により、古代の都人が地方に対してどのようなまなざしを向けていたか、その一端を探ることができるのではなかろうか。

注

1　以下『養老令』の引用は、井上光貞他『律令』（岩波書店、『日本思想大系』三巻、一九七六年）による。

2　黒板勝美編『類聚三代格後編　弘仁格抄』（吉川弘文館、『新訂増補国史大系』第二十五巻下、一九三六年）。

3　『土左日記』本文および和歌の引用は、『新編日本古典文学全集』による。『土左日記』以外の和歌の引用および歌番号は『新編国

歌大観　ＤＶＤ-ＲＯＭ』による。

4　木本好信・中丸貴史・樋口健太郎編『時範記　逸文集成』（岩田書院、二〇一八年）。

5　黒板勝美編『扶桑略記　帝王編年記』（吉川弘文館、『新訂増補国史大系』第十二巻、一九三二年）によると、『扶桑略記』承平三年十二月十七日条には、「南海国々海賊未レ従二追捕一。遍満云々。就レ中。阿波解状。今日。定二遣国々警固使一。」とあり、警固使の派遣の対象となるほど、海賊が盛んに活動していたのは南海道諸国であり、畿内である和泉国は海賊の被害が少ない、あるいは無かったと考えられる。

6　『土左日記』青谿書屋本の文字数は、鈴木知太郎「土左日記の構成」（『国文学解釈と教材の研究』十巻十四号、一九六五年十二月）に拠る。以下、鈴木氏の説は本論文による。歌数は、私に数え上げたものを表にまとめた。

7　一月一日条は、総字数一九二文字と分量が多い記事であるが、和歌の詠出は為されていない。しかし、記事の中身は記録に徹したものではなく、諧謔表現が織り交ぜられている。

8　塚原鉄雄『王朝初期の散文構成』（笠間書院、一九八七年）。

9　『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）には、『古今和歌六帖』の成立時期について次のように記載されている。

詠歌年次の確認できる最も新しい歌が貞元元976年作の「琴の音に峰の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ」（斎宮女御）であることから、現在の形になったのはこの年以降となる。

10　西野入篤男氏は、「『土佐日記』の海―都志向との関わりについて―」（『文化継承学論集』二号、二〇〇六年三月）において、「『土佐日記』の海は、特定の季節観で捉えられることがない。作品世界の季節は一月であり春であるが、海は「雪＝冬」や「花＝春」と捉えられたり、（中略）秋の装いすら感じさせることがあるのである。」と述べている。このような季節の混在という現象は畿外でのみ見られ、季節感の無さを表現している。

11　伊原昭『平安朝文学の色相』（笠間書院、一九六七年）「土左日記の色彩表現」（一九六二年六月初出）。

12　冨士谷御杖『土佐日記燈』（国光社、一八九八年／一八一七年成立）。

13　中田祝夫『新註国文学叢書　土佐日記』（講談社、一九五一年）。

14　比護隆界「土佐日記に見られる地名錯雑について――いわゆる「脚色虚構説」に駁す――」（『文芸研究（明治大学）』五十九号、一九八八年三月）。

15　萩谷朴『土佐日記全注釈』（角川書店、一九六七年）。

16　今井俊哉「旅の歌の系譜としての『土佐日記』の和歌」（河添房江編『古代文学の時空』、翰林書房、二〇一三年）。

17　「箱の浦」という語の歌中での用例は『土左日記』が初出であり、当時「箱の浦」は歌枕として成立していなかったにも拘わらず歌に詠み込まれている。歌枕か否かの違いによって、地名を歌に詠むか詠まないかが決められているわけではないという点に留意したい。

（おおば　けんた・北海道江別高等学校教諭）